

和泉式部の歌と同時代の文学

大橋清秀

一

和泉式部集に次のような歌がある。

清水文雄氏校訂 和泉式部歌集 岩波文庫

昭和三十一年三月
刊本文による。

秋（二十首のうち）

四八 すず虫のこゑふりたつる秋の夜はあはれに物のなりまさ

るか

この歌は松井本和泉式部集に「むしの歌よみしに」として出ている（二七四一）。この歌を読んで、私は源氏物語桐壺の巻に出ている次の歌を想起した。

池田亀鑑博士校註 日本古典全書 源氏物語

一 朝日新聞社 昭和二十一年一月刊本文による。

鈴虫の声のかぎりをつくしても長き夜あかずふる涙かな

（一六二頁）

はたして和泉式部が源氏物語のこの歌の影響をうけて前記の歌をつくつたか如何かはこれのみでは速断出来ない。そこで古今和歌集、後撰和歌集、拾遺和歌集をひと通りみて類似の歌を求めてみたが、類歌は見あたらなかつた。

次に古今和歌六帖 統国歌大観本文による。 の「すゞむし」のところには、

三四八四二 邂逅にけふ逢見れば鈴虫は昔乍らの原ちま声ぞ聞

ゆる

三四八四三 人の妹かると聞くまで女郎花もと毎に鳴く鈴虫の

声

三四八四四 狩にきて野べにぞ惑ふ鈴虫の声はさやけき知べな

れ共

の三首があるのみで、類似歌は見あたらぬ。

さて和泉式部集には紫式部の名は出ていない。しかし伊

勢大輔集 群書類従巻に、
第二七八

女院(上東)の中宮と申ける時。内におはしまししに。ならから僧都のやへ桜を参らせたるに。今年のとりにれ人は。いまありそとて紫式部のゆつりに入道殿(道長)きかせたまひて。たゝにはとりいれぬ物をとほせられしかは

詞花
古へのならの都の八重桜けふこゝのへに匂ひぬるかな
(五首略)

和泉式部院にまゐりて始めたる夜逢てもものなといへとおほせられしかは夜ひとよ物語などしあかして年ころかたみに心かけしほとのことなどいひ出てつとめてつほねよりいひたりし

思はむと思ひし人と思ひしに思ひしかともおもほえしかな

かへし

君を我おもはさりせは我を君思はむとしもおもはましやは

とあり、「思はむと」「君を我」の贈答歌は「宮にはじめてまゐりたりしに、祭主輔親がむすめ大輔といふ人をいださせ給ひたりしと物語などして、局において大輔のもとに(九三〇)」「返し(九三一)」として和泉式部続集にあることによつて、すでに先学が述べていられるように紫式部、伊勢大輔、和泉式部がともに中宮彰子にお仕えしていたことがわかり、この頃紫式部はすでに源氏物語を作つて居り、

同じ宮に仕える和泉式部も源氏物語にふれる機会に恵まれたことが想像されるのである。

源氏物語と和泉式部の歌との先後關係については判然わからず、源氏物語桐壺の巻と全くかわりのないものであつたかもしれない。また「あはれに物のなりまさるかな」とある和泉式部の歌と源氏物語の「鈴虫の」歌とは用語は似ていても、表現されている内容は異なつている。が私にはこの紫式部と和泉式部との二つの歌の発想の類似が偶然のように思えなかつただけである。たとえこの二つの歌が全く無關係であつたとしても、和泉式部が源氏物語註にふれる機会のあつたことはまちがいないと考えるのである。

二

次に和泉式部続集に、

一〇九〇 夜いもねぬに、障子をいそぎあけて、ながむるに
恋しさも秋のゆふべにおとらぬは霞たな引く春のあ

けぼの

と言う歌があるが、これは枕冊子 田中重太郎先生校註 日本
古典全書枕冊子 朝日新聞

社 昭和二年六月、
月刊本文による。の、

春はあけぼの、やうやうしろくなり行く山ぎは、すこしあかり
て、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。夏は夜。月のころはさ
らなり、關もなほ螢のおほく飛びちがひたる。また、ただ一つ二

つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。雨など降るもをかし。秋は夕暮。夕日のさして山の端いと近うなりたるに、鳥の寝どころへ行くとして、三つ四つ、二つ三つなど飛びいそぐさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるがいとちひさく見ゆるは、いとをかし。日入りはてて、風の音、虫の音など、はたいふべきにあらず。

とあるのと似通つてはいないであろうか。これも古今和歌集、後撰和歌集、拾遺和歌集及び古今和歌六帖に類似の歌をさがしてみたが見あたらなかつた。これまた和泉式部の歌と枕冊子との先後関係については断定出来ないが、清少納言枕冊子に「いとをかし。」とあるのに対して、「恋しさも」と和泉式部が歌つたのではないかと思われるのである。和泉式部は中宮彰子、清少納言は皇后定子と仕える宮は異なり、清少納言は早く後の薨去にあい、二人はそれぞれちがつた境遇にあつたが、先学が説かれているごとく親交があつたと考えられる。それは和泉式部集にある次の贈答歌によつて想像することが出来るのである。

同じ日、清少納言

五〇四 駒すらにすさめぬ程に老いぬればなにのあやめも知ら

れやはする

かへし

五〇五 すさめぬにねたさもねたしあやめ草ひきかへしても駒

かへりなん

詞書にある「同じ日」については五〇三の「ながれつつみつのわたりのあやめ草ひきかへすべきねやは残れる」の歌の「詞書脱落カ」と清水文雄氏が脚註に記して居られるように、

祭主輔親がむすめの、花にきじをつけていひたる

五〇一 春の野のかげはふけども

かへし

五〇二 鶯のねぐらのはなとみる物をとりたがへたる心ちこそ
すれ

の詞書と「同じ日」とは考えられず、五〇三の歌の内容をみるとやはり五〇三の歌の詞書が脱落していると考えられ、「同じ日」についての詳細は現在のところわからない。五〇四、五〇五の贈答歌は清少納言集 群書類従巻第二七四及び書陵部蔵甲本(五〇一・

二八)にはみえない。なお五〇四の歌の詞書について清水文雄氏は「清少納言―乙本・清本『清少納言に』、内本(イモ)乙本等(同ジ)」と註記して居られるのであるが、この「清少納言に」と言う詞書によれば五〇四の歌の作者は和泉式部と言うことになつてしまふのである。

五月五日、菖蒲の根を清少納言にやるとて

五三三 これぞこの人のひきけるあやめ草むべこそねやのつま

となりけれ

かへし

五三九 ねやごとのつまにひかる程よりはほそくみじかきあ

やめ草かな

またかへし

五四〇 さはしもぞ君はみるらんあやめ草ねみけん人にひきく

らべつ

おなじき人のもとより、海苔のおこせたりければ

五四一 まれにてもきみが口よりつたへずばときける法にいっ

かあふべき

三

また日本古典全書枕冊子の底本である三卷本、及び前田本、堺本枕冊子になくて、伝能因所持本系統の本文にのみある、田中重太郎先生編著 校本枕冊子上巻

古典文庫 昭和二十八年一月刊による。

いわつゝしもことなる事なけれと折も七を見るよとよまれたる

さすかにおかし(七十草)

の「いわつゝし」「折も七を見る」は、和泉式部集の、

春(二十首のうち)

一九 岩つづじをりもてぞみるせこがきし紅ぞめの衣にたれば

によつてゐることは、すでに保田与重郎氏の和泉式部私抄

育英書院 昭和一七年四月刊 一一八頁や、岡一男博士の源氏物語の基礎的研究

東京堂 昭和二十九年、清水文雄氏の和泉式部歌集解説 同書 三

一月刊 二五五頁、

において詳細に述べられてゐる通りである。(一九の「岩つ

づじ」の歌は

後拾遺集第二春下に「つゝしをよめる」として出ている(一五〇)。

なおまた日本古典全書枕冊子解説において田中重太郎先生は「人皇第五十二代嵯峨天皇の御代には、すでに漢詩の

題詠が廷臣の間で日常化し、やがて和歌の題詠が普遍化し

て、題の数五百を有する類題和歌集の古今和歌六帖が生ま

れた。これらの題詠や、当時までに成立した諸種の辞書、

類纂の類が清少納言の枕冊子へ直接に与へた影響は大きい

ものであらう。唐の李義山(李商隱)の雜纂もあるいはこ

の冊子の典拠となつたかも知れない。また和泉式部集に見

える『つれづれなりしをり、よしなしごとにおほえしこと』

『世のなかにあらまほしきこと』以下『人に定めさせまほ

しきこと』『あやしきこと』『苦しげなること』『あはれな

ること』などの題詠、また、やや後のものではあるが、梁

塵秘抄の題歌(四句神歌 雜)などを読むとき、『……は』

『……もの』といふ枕冊子の形態が決して彼女の独創でな

いことが知られる」同書と述べて居られるのであるが、こ

こにあげられてゐる和泉式部集の詞書は群書類従本 卷第二

の本文によられたもので、榊原家蔵忠次文庫旧蔵本を底本

とする岩波文庫和泉式部集をみても、

世の中にあらまほしき事(三三七)三三四(一)

人に定めさせまほしき事(三三四)三三四五(一)

あやしき事(三三六)三三七(一)

くるしげなる事

(三四八・三四九)

あはれなる事

(三五〇・三五四)

となつているのである。和泉式部集諸本系統については西下経一博士「日本文学大辞典I 新潮社 昭和、清水文雄氏「和泉式部集の形態に関する研究」国文学試論第一輯 昭和八年九月刊所載、「和泉式部集の成立」国文学攷第一輯 昭和一〇年刊所載、岩波文庫和、吉川理吉氏「和泉式部集宸翰本類について」泉式部歌集解説、吉川理吉氏「和泉式部集研究資料と文献」望郷三月一〇月再版、藤岡忠美氏「和泉式部研究資料と文献」望郷八月号所載、「和泉式部集諸本系統論(上下)」国語と国文学昭和二十四年七月号所載、「和泉式部集の成立」国語と国文学昭和二十六年五月号所載などのすぐれた御研究があるのであるが、岩波文庫和泉式部歌集解説において清水文雄氏は第一類和泉式部集を、

第一種 流布本以前の形態をとれるもの

第二種 流布本

第三種 右二種のほぼ中間形態をとれるもの

の三種の系統に分けることができるとされている。この分類に従つて第一類和泉式部集を中心に諸本の本文の大体をみてみると次のようになっていゝ。

第一類 和泉式部集

第一種

(A) 榎原家藏忠次文庫旧蔵本 世の中にあらまほしき事

内閣文庫蔵和学講談所旧蔵本

彰考館文庫蔵甲本

(B) 彰考館文庫蔵乙本

第二種

群書類従本

つれ／＼なりしおりよしなしことにおほえしき事

世中にあらまほしき事

第三種

静嘉堂文庫蔵岸本由豆流標註第三草稿本

つれ／＼なるをりよしなしことにおほえしきこと、もかきつけしに世の中にあらまほしきことイ

世中にあらまほしきこと

第三類 宸翰本和泉式部集

第一種

谷村一太郎氏藏伝後土御門院宸翰本

つれ／＼なりしおりよしなしことにおほえしきこと

世の中にあらまほしきこと

宮内庁書陵部蔵本

つれ／＼なりしおりよしなしことにおほえしきこと世の中にあらまほしきこと

第二種

無窮会神習文庫蔵伝後醍醐天皇宸翰本

つれ／＼なりしをりよしなしことにおほえしきことよのなかにあらまほしきこと

イつれ／＼なりしおりよしなししき事 世の中にあらまほしき事

世間にあらまほしき事 世中にあらまほしきこと

第四類 松井本和泉式部集

静嘉堂文庫藏松井簡治博士旧藏本

つれ／＼なりしおりよしなしことにおほへしことと
もかきつけしに世中にあらまほしき事

これによつてわかることは類従本の「つれ／＼なりしおり云々」の詞書は第一類和泉式部集本文にもとからあるものでなくて、清水文雄氏が岩波文庫和泉式部歌集解説に「類従本は内閣本を親本としてゐることは明かである。」

同書 三とされて「類従本は忠実に内閣本を継承してゐるとはいへないのであつて、類従本校訂者の私意の加はつた跡

が随所に見られ」として一例を示され、その原因として「類従本の校訂者は、どういふわけか、原本の本文のかはりに、行間に書入れられた本文の方をとつたものと思はれる。」同書 三と述べて居られるごとく、この場合も類従本は内閣文庫蔵和学講談所旧藏本の本文の「世間にあらまほしき事」をとらずに「イ」として行間にちいさく書きこまれている「つれ／＼なりしおりよしなし事におほえし事世

の中にあらまほしき事」をとつて詞書としてゐるのである。そして内閣文庫本がイ本としてゐるものと本文は伝後土御門院宸翰本系統のものかと考えられるのである。とすれば宸翰本系統の和泉式部集の成立は時代が下るから、これ以上の詮議は不要かと思うが、一寸ふれて置きたいのは和泉

式部統集に、

つれづれのつきせぬままに、おほゆる事をかきあつめたる歌
にこそ似たれ ひるしのぶ ゆふべのながめ よひのおもひ

よなかのねざめ あかつきのこひ これを書きわけたる

として四十六首の歌（一〇一四―一〇五九）が収められてゐることである。この「つれづれのつきせぬままに、おほゆる事をかきあつめたる歌にこそ似たれ」と言う詞書が、宸翰本の「つれ／＼なりしおりよしなしことにおほえしこと」によく似ていて、「ひるしのぶ ゆふべのながめ よひのおもひ よなかのねざめ あかつきのこひ」とあるのと「世の中にあらまほしき事 人に定めさせまほしき事 あやしき事 くるしげなる事 あはれなる事」と題詠が集められているのと同じたぐいの物と考えて、宸翰本和泉式部集の編者が和泉式部統集のこの詞書をとり入れたのではないかとも考えられる。

四

そこで和泉式部集と枕冊子との先後関係を考えてみるに、前に記した「岩つつじ折りもてぞ見る」の和泉式部の歌が伝能因所持本系統の枕冊子の本文のみあつて他の系統の諸本に見られないことは、田中重太郎先生が日本古典全書枕冊子解説において「枕冊子には草稿本・初稿本・再稿本

などがあつた。このうち草稿本らしいものは現在一本も伝はつてゐない。(中略)本書の底本とした三巻本は、かなりくづれてはゐるが、この初稿本の姿をほぼ備へたものであらう。この草稿本、初稿本の成立年代は、この冊子中の

史実の文から傍証できるのであつて、長徳二年と長保二年との記事が充実してゐることは、これらの記事がその年代を離れないころ執筆されたと考へられるのである。さらにこの初稿本を増補した再稿本があつたと思はれる。それはその本文における人物の官位名その他から見ても、その安元年(一〇二一)までに成立してゐたと考へられる。現存の伝能因所持本にはこの再稿本のおもかげを留めてゐるものと推考されるのである。^{同書}二四頁と述べて居られるのによつて明らかかなように、初稿本に増補された部分に和泉式部の「岩つつじ」の歌がとり入れられていたのであつて、清少納言が和泉式部の歌によつて枕冊子を増補する以前に、既に述べたごとく和泉式部が枕冊子の「春はあけほの云々」によつて「恋しさも秋のゆふべにおとらぬは」の歌を作つていたかと考へられるのである。なお枕冊子の成立については類纂形態をもつものが原形であるうとされる池田龜鑑博士の御説によらず、雑纂形態をもつものが原形であるうと考へる説に従つた。又、三巻本と伝能因所持本との關係については前者をA的、後者をB的と見る説に従つた。

そして清少納言が枕冊子の類纂の部分を書くにあつて特に和泉式部集の詞書の影響を受けたとは言ひ難いのではないかと思うのである。

五

以上述べたごとく和泉式部は同時代人である紫式部と清少納言と親交があつたと思われるところから、二人の女性によつて書かれた源氏物語や枕冊子にふれる機会があつたことが考へられ、和泉式部の歌が同時代の文学である源氏物語や枕冊子の影響を受けていると考へられるのである。

—三三・九・五—

註

和泉式部の歌と源氏物語との關係について吉川理吉氏は国文学論叢第二輯所載「和泉式部集五巻本の正偽」の中で、

みし人の雲と成にし空なれば降雪さへもめつらしきかな

(斎宮女御集 群書類従巻第二七一)

見し人のけふりとなりし夕より名もむつまじき塩竈のうら

(紫式部集 群書類従巻第二七四)

みし人のけふりを雲となかむれば夕の空もむつまじきかな

(源氏物語 夕顔)

はかなくてけふりとなりし人により雲あのかくものむつまじきかな

(和泉式部集 二七四、三七二)

などの歌をあげて触れて居られる。(同誌再版五七、五八頁)